

熟語 plus ou moins と程度副詞「多少」の否定的評価をめぐって

三浦 龍介
(青山学院大学大学院)

熟語 plus ou moins は多義であり、Abé(2000)によると大別3つ(I「程度のばらつき」, II「否定的方向づけ」, III「緩和」)の意味があるとされ、意味 II における plus ou moins は、多くの場合、「あまり～ない」と訳出できるが、このいわゆる否定対極表現(「～ない」と必ず対になって用いられる表現「あまり、それほど、たいして～ない」)と評価レベルでおおむね等価とみなすことのできる程度副詞「多少」も同様に訳出可能である場合が多い。

(1) A : Pierre est-il intelligent? / B : *Plus ou moins*. (Abé 2000:76)

A : 「ピエールは頭がいいの?」 / B : 「あんまり / 多少 / *少し」

Abé によれば 意味 II は、複数の視点からの「評価の対照」(話主間に評価の対立)を示し、被修飾要素に「望ましさ」が認められるという。そして plus ou moins の機能を、話主は「望ましい」という評価を認めない、あるいはその「望ましさ」の程度は低いとするとしている。結果、(1)では、話主の否定的評価(*pas très intelligent*)が示されている。

一方、「意義的にプラス評価ともマイナス評価とも言えないもの(「甘い」「辛い」など)が、「多少」と共起するときにはマイナス評価をくぐって来ると認められる場合が多い」「この酒は 多少 甘いようだ.」「この酒は 多少 辛いようだ.」(渡辺 1988:291) と渡辺が指摘するように、話主の否定的評価を示す場合がある。

本発表では主に話主の否定的評価ならびに話主間の対立をマークする意味 II を出発点に、「多少」との操作の共通点を検討する。

Abé, H. (2000), *La locution plus ou moins et la subjectivité*, thèse de doctorat, Université du Tohoku.

渡辺実 (1988), 「多少」『国語意味論』(2002), pp.285-297, 塙書房.